雙魚堂起居注
明治四十四年
六月以降
特別
イ4
1919
557

176822

# 復興堂起居注

如治四十四年六月以降

六月

一日

後加賀家ニ来ラル紙ヲ持ヘ為「歸塵」ヲ以テ登校、宮中山本ニ在ル所ノ海ニ於テ拾ヒ紙峡ヲ「新日本」編輯ヲ紙ヲ話ス、現ニ会ヲ要ス定欵修正ヲ為ス、大阪ノ紙

東京 牛込 赤城 下市 鳥山 謙吉

38- 9345

あれ御山本紀生 今爰の方原姓三郎
とも生事書ゆるも、少日三所とも堪用
するなり文藝拾合し取入配事其他
手書の体を根底す、石津兵五とも
一身上の体有来書ゆるも

二日

今朝晴、少日降雨あるも、大掃除を
行ふ、早朝とも御出高木明日食ず
を給ふ、明日食ニ十六日高木昨ニ七
日二十五夜拂曉、六井景一高山圭三
とも来書ゆるも、少日氣あらしらず

拂曉を催ふて俄に拂す、於明其儀
事終、少刻とも新子拾田善所書出
殿の御拂ニ為拾住書者七八を矢
事候ニ出部ニ令しとも所用根底覧
ふ也をともすして散ず、

三日

梅天陰樹 氣ふすくんず朝年明日
食を給ふて貴董を弁す英堂令す
少日明日高田より降其詞あるも少
刻とも富士見和ニ過遠とせニ文藝
根令ゆ拔者を会し令の事尽ニ

同じく来る、登校子弟をもとす、塩
津為見えるも我々の絵えるまきを賜ふ
石本市茶田思来る、桑田国主の
出く接す、在神戸書退庵大阪の山
本郡士其鳴桂治りて、書状を書す
物ある、田野文治りて吉田本伍松山
蔵元来る吉田より淑戸内海権史論
を賜る松山より古九条酒注を賜る
る、雲茶北市より紫藏を賜る、松
来雨あり、今物なり段帳をつる

二百

雨、所用の松井郡流と雪流を流す、木村
賢之印就職し件、有来流尤時なり帝
国国主張に於て文部省嘱托の様
準目録に於て逐陳審議を如何
後二時に至る、登校新潟の様又松
井高等(屋造)の人なり伯新潟出
越する、所根滅する、堀内の
ことなり文蔵根分幹部分を再
き諸般のすを根滅す、廣井一、深
井原邦神戸の伊藤俊介の者に
接す。

東横原蔵

九日

晴、當山三代前一年上ゝ件ヲ事務ニ、二
三の節ちをまかす、帝國圖書館の
委員會ニ臨み三浦ヨリ議案
説了、狩野宗八出版印の件ニ付来
論、十一日上野太子登輿、并陳列会ニあ出
内美術学校へもよし、同日木村観音寺
家あ来る、同日下谷北南山湖光圓来
鉄斎翁式来る、内尾あ席あるも来
る、狩田亮中村不折来訪あるし、

十日

雲小雨、加賀冬ニ来る諸葛の代
料を持ち参りしも林あ刷帖を瑞
あ川楚州をもらうし来る、大淀
行係田邊を使わし託す、翌校了
論を見る、大阪より孫氏砂川
雅峰奥ニ安宇ニ伸ニ出を要す、牧
野赤ニ出を接す、与理平美
出を訪ひ又高木を訪ねて茶葉
外二三の品量を贈、不在中高田
弥一郎来訪ありし、若子入り杉山
茂丸来る、左神ニ東園寺を尋ね
郡長訪正方ニ書を見せ、内藤久

竟の書こ候す

十一日

雨、桂洲村、大石現(四)、木村条市、小林堅
三来訪、指内経徳に書こ候す、書
信数、採内通過来話、今夜もし大阪の
行李をとりの事、此行採内副を
来月一日大阪に異りすると行其の準
備を為さんが為也、今日は此の急行
にて出発す

十二日

を新宮刻大阪に着、先着し関東視
次先づ来る跡を聞川雅俊山本和太郎
あれかし来る採内副につき打合を
為す博文書すまり荻谷の書輪を見
す、客散して後、角田法々を大阪毎日
の消息要事を大阪朝日の訪ふ副
に投宿につき打合を為す、砂川を訪
ふて論ず、和家の出口すると新宮の事行
の事宮を托す、下村正たりしも(三)
取京都掛布会の宮を取り来る、
採内に出を取す石原正三郎来訪、

十三日

晴、早起小川為治郎下村正太郎角田勘
一郎海道霧真淳本與一橋五番
中山大人海元友治郎より書簡を始
す、関為親次来話、花家、五十円外
二車代印金合印拂遣す、藤田忠
治郎を紹介、抱うんて海花真ニ牛
鍋ニ饗を受く、小川氏傳多くの
知人ニ入らす、昨日出鳴うとの事、新
聞記者を招くに付七社ニ安平田社を
覆す、木崎如当小川簡書情文書来
話、又新聞平田譲断中井隼

太ニ能戸ニも蕃田来れ来る

十四日

晴、ニ社蕃田能戸すなく滝為貞治郎
兼木覚ちりし関為親次来訪、道
逸海流の新を答新聞社ニ解つ、塚
内東儀ニ書を書す、先生元治郎山
本知士来訪、神戸の二新聞ニ塚内
の演説を載せる、早稲田講演を印
送す、砂川と電話を話す、ゆ夜五
時ニも出鳴うとの方ニ塚内副投
霞ニ行ん、頃七新聞記者を招く

大坂無事にて兼池道菅角田浩之大
坂朝日にて田井信一大坂ヨリ相ならし
堂田黄波 紀相ならし志北板如案
ゆるすとも井上帝岡にも中尾来る
狩来雨ありし

十五日

雨、今朝高宮様平へ寄ると云ふ、大坂的
書井上民道追原様を始る、英雄と
也とも見し岡部を相ず、関屋家次来
流、十的の流来ずして京都に赴く、橋
家に投ず、下村正太郎伴ひ太郎来

訪、中安氏こゝを訪のて保田剛こゝを
托す、橋本来を訪のて出留を起る
四区の書簡を購ふ、高田学士にも
藪田上原伝ゆ、相待て伴ひ来電
ありし、狩まへ来宮ちく早く帰す

十六日

雨、雪ん出しありし、平野腹代を訪のて
ある姓等のことを打合す、銀田新七を訪の
て保田剛の用旅を托し橋本雪を訪
のて藪田出簡二十五通を購ふ、自
下間宣教を来本教等に訪のて亡寄

来る、今夜狩り流年まで海平の道
に上る

十八日

曇天、九時許稽古直に海電、高田
と話す、杉本胤恭来話、塩田を詠
て文藝根拠の件を話す、大坂の
何川雄峻に書を投す、若来豪雨

十九日

朝来稀雨の暴風雨あるも止まり
をつあく能はず、冬天損害のこと

ず、十時なれども登校増田森と池と井
貫一来田長代々書を投す、其天須
濱田健治の妻死去、計吊状を出す、
今夜の大坂の藪田天明来る学校
に迎へて商不法列館の地を示し
大隈家に伴ふて樂庭を為す、貞
和の講話伊十四ノ六左来つ、幼立
印等の書の頃に味線に鈴[illegible]を添
八九的退散、京都平野殿位様反
藤田思の書に接す、四的[illegible]風
漸く収まる、藪田にも昆布等も須臾
紙を貼る。

二十日

晴、方氣勢穩、[illegible]紙を各地の風[illegible]海岸を修[illegible]、市内の家屋樹木の倒潰[illegible]し、九州[illegible]異常と分す、[illegible]市[illegible]数田[illegible]人畜を[illegible]と[illegible]余も行き[illegible]、[illegible]の書を接す

二十一日

晴、[illegible]栗田[illegible]三[illegible]栗田[illegible]風[illegible]人江述一事[illegible]、[illegible]を[illegible]ち[illegible]其[illegible]の体を視察す、登校[illegible]を見る、京都の中安[illegible]に[illegible]事務[illegible]、真崎桂[illegible]印[illegible]暴[illegible]見[illegible]、大阪[illegible]、[illegible]海列の[illegible]を出張すべきし書簡五十[illegible]を接出す、本田[illegible]教来訪、山本[illegible]士と[illegible]の高[illegible]海列[illegible]薬[illegible]に付交渉[illegible]三萬五千円と決定す、数十日共心[illegible]ことに[illegible]り決す

二十二日

晴、真崎桂[illegible]を[illegible]、高田[illegible]内を

訪のこと大阪の行堀海す、旅宋江基石
来訪畫を贈る、生迂に托し象部に
注文したる紀印印出来、これを見て文
庫堀合ふも、余の今去在職の方に對
し贈るべき印也、長方角連環鈕也
大阪の上井貫一光吉元次印の書に接
す、登校猶和部出の件行幕山治一と
交渉す又二三の事務を定す、市原
松浦の書に接す、山田治郎来る名家
の紀七程を交付す、松山花吉来る
終り後に集、座右しく袷羽織を着
す保田とも波多印勅二来る、

二十三日

小雨、旅宋江基石山方新行に赴こん
とするに行来訪、亡兄友人校友永田
誠一山藤直吉氏職の件行来
訪、印刷今託の垂級会に臨む
坪内道遥来訪、高木を訪ひ更
に英書を今す、飯食四月廿重
店に蘆摩氏秀塩吉錦形注
塗金二匁垂秀人才を贈る二十
五円教拂、之物家飯に井上
尼れ印の物朝を祝する今行

出願す、旅館と悪徴無数あれ
即ちも来る所又何日雄
峻ちも来電ありし、建部脇
結婚の披露状送利の相談
解序の訳到る、

二十四日

晴、平里殿居吉田半達永田近藤来る
国子殿河里々本代十四拂、[illegible]山の杉
山ちも紀念会を贈り来る、相談
解序延長有梅状を見す、大阪く
若電ある出願を報す、大阪の白

梅雄紀記者々河前の墓碑拓本を
交付す、かぐ寺を来る、り清印刷水
半帯の謝を二万五十円を贈る、杉山
成吉来る、六日ら十分忍り、すて大
阪へ向け出す又文藝現今演劇
好奇と云也

二十五日

晴、朝八時大阪着花屋々投す、大
阪国書館の上杉六頁之来る、[illegible]
ちれ家当前四十四寺を交付す、
のくり殿々応答を得す、[illegible]

花屋前田訪宅に向く、無之間相拂、
市内各寺の所々通信を出す、朝日に
物其他所々、家々食事を投す、朝日
にも坂内割くる間寄附に今牧にも
出を領す、日清生命の所井朝日の忘
原来る、物ゆゑ坂内通過来着十
二時過就寝

二十七日

晴、奥野宇に他来る、方面にも
重要集に伴を三ヶ所、海老友次郎
来訪、午後一時の汽車にて坂内出し

遅間伴京都に抵く車中堀崎山
一日と話す、橋家に投す下村正太
郎中安新三郎、勝本屋を
訪ひ出登を見る、夜を見
ハ新喜く中安に報のん片山来
の門弟の事を親る、十一時帰り
出す、伴云々来訪

二十八日

雨、新喜和主等志和氏次郎来訪
ハムレツトを見て居て、俗を見ると云
交際あるも、田邑朝日支局記

こ説然の繋を受け居る道遥
北浦崎を離く、今夜堺内東の
儀の数人の仙漫、着、紀の様
を詣のて詣所の打合を為す、今夜
道遥紀の二輪府、田中積積
来くこゝる、名古屋の志乃代次郎
らも電信を堺内割を同地に演
すること決定し、故電報なるも、花
屋に拂四十銭国出来候ことと此の
拂五十九国出来候、

三十日

曇天、九時大阪国書館に到り名家古
簡の陳列を見る金の出品四分を占む、
大阪朝日の岡田義馬、近松庭出没
のことを云ひ来る、砂川来紹詣所の打合
を為す堺内天満、東儀雲の沈松外会
社の社長長沢某来る、名古屋の志
乃代次郎らも来者なるも、小川らも
文藝場会寄附金三万円東京
堺内七十五国交付す、今夜出発
こ東京義平を紹のて金をこゝる
を交渉す、松本垣なり本家海苑
兼本海苑山本交々来る松本らも

[illegible]五千円也結局、紫安元吉
来紛、七時二十四分の急行汽車を
向東の途に就く

○七月

一日

今朝大阪新橋着直に向電、不在中
の伝言を捨す、十一時以後に於て
[illegible]決算と事[illegible]の[illegible]
[illegible]つき理事会をつあらきに[illegible]
四時に至り罷む、大阪の山本印士[illegible]

に井貫一在阪中に東儀住内者
を取り、英電と合し[illegible]
終日雨、上電を以て次に答ふ。

二日

雨、関屋親次吉田より道大江し[illegible]
[illegible]事[illegible]、[illegible]田忍の書
[illegible]接す、在阪住内に書を投す、公井
貫一中安代[illegible]
[illegible]一時[illegible]
[illegible]
重要の件を堀識す。

三日

雨、安田靫彦来訪、写生ニ好宗鏡寺来訪
坂内来る、来儀ありし二日目角座湯賞
の電報二通来る、高木を訪ひ土佐
更紗朝鮮画墨蹟を見る、軸数幅
代ある物を蔵す、紗を貰ふ二
十日夜の急、菊池来る西田氏を
去る卯すと午後より登校、四時より
大隈邸ニ於て評議員会を了へて
九時散会す、京都中学新
より来書、河より

四日

此頃来訪家あり、西洋より坂田の
言ひ来る、安田靫彦・斎藤氏納
荒木十三を高く来りたり、送別
此花録の如き一枚贈る、三好氏
来る、坂内の雅趣、東洋美術
より来書、高木を訪ひ二三の
書画を観、中田家方に竹根
花瓶一説を購ふ、菜花と
帰宅、殊に遊びし帰宅す、来訪

五日

晴、国玉波河邊木彫の唐草一枚を

也、例々依り投反大会を開始致
餘々つゞめく、早稲田大学投反俱
一朱印の体育委員会をつゞきし
時散会す

七日

晴、廣田主任来る又大江乙彦つ、か
藤森氏来る、十時ゟも即刻学花の運
役会ニ臨む、日時投薬田寄船
商品陳列館の体育委員会ニ臨
む、出版印ニ到る事務を見る、
来美護来訪大阪図書館ゟも

来書到る、十日ゟ後南蓼文庫ニ
於て現学博士木村栄の講演目を
紀すこと有ゆ来る、木村栄は
明り現学上ニ大めなる見を有する者
大阪角生ゟ道ゟ通り可寄会
書大入ニ満ち来る

八日

晴、風、永井一来、安田勲来訪、大
阪図書館上於ニ見ニ書を與ふ又
来美護一身上の体育会面直ニ
書を與ふ、在阪中ニ并ニ書

を止て、学校に於て出す、登校早
編曾学校の編輯会を開く、出
版部の体育峰村抱月と語す
研究室に設備其他に関する委
員会に臨み、四時帰来

九日　日曜、

晴、廣田生於来る、高木を訪のこと二
三の骨董を解のこと、明日夜を待のこと
獲る事なし、英米と女教を與す
大阪博文堂にいたすこと接す其を参の
土肥其曙大阪に於ける劇の状

況を報告の所見来る、不在中校
友武田璟来る、先石北紙漫遊
しるすこと付後に五時にも来書ゆるも
今日状晴を好こんど異熱甚し、山
田清雅来る、

十日

晴、安藤金加ハる、武田璟、後津の漫
出を変らしまする、大阪興任子臨み武
縁者を與の、那東江生石来る新
河川に付栗林武漫者を與の、皆
遊遊来紛、大阪清劇の状況を話

す、綾山漸く通、国子須河堅来る
左右城地堅々自十四并々及雨を
都送す、家都嬉花来く郭り骨
董二匹返送す、四谷銀河手形
（二万五十円 四月陰下宮者）新銀行
又手形を差又る、大阪の山本和士来
訪、此方之株の家有ひ高乱帯の
損害を要するを云ふ、ま方よ
り登校理事会をつあきくるを云ふ、
香川新撰文会ありと来書ありし大阪
国書館にも名家書簡四十五年を
庭る、山田清低に書を與す、

十一日

明、森堅三来る新書自新聞を云ふ弧
の祝詞を以て遅延せしむ、右田信義来
る、東儀城南来る大阪志しるす所現
生を要き自分板の動定を為す、横
矢金房来話、山田清低来る、前橋
春義、大阪書略有之、藤平二州
義助に書を與す又奥州宇之助
光吉元次郎に書を投す、東新寺
下間宣義、雲岡新寺以為瑞
雨光書第書札を與す、其二重
重のるすに関す、其の家新聞

とりも来書取り直に答ふ、遠元反
次ハ今井貫一ニ書状を出す、

十二日

晴、稔村宗八来田中迄来る、まゆよ
り登校、重幸印のうち紙を見終て
塩田通り迄を行て見つる、杉山武
光来る、吉田亭伝来話、

十三日

晴、関屋紀次来る又蓬城会のう
を話す、春晩又次ハ引続まて話度

田屋松三省亀の山下ハ来話ハ来る
小林望三ニ所見有自行ハ又千葉
祝祭を九段第一記せしむ、登校の
務を為す、於電論ニ印しきも来
書取りて、三省とも信頼ニ百科所
典、以聴事好視の様す、ゆるす所
後ニ青葉ニ執ニ載き、枝料也
夕刻ニも帝大山ニ上ニ電ニ志
賀ハ井九馬三ハ之と合ふ、志賀
ハ計畫中央亜細亜学術説可
表紙ニ為也、大内其在ニ書来
生世話を依頼ニ為ハ大丈夫

と申来る、

十四日

曇冷、小雨、鈴木敬義もまた来訪、
滋賀義烈の件に付高田修に故人江経
村山某田元氏来訪、此日将織
来、村山氏と飯来訪、被を贈る、
日下英名と会す、総文の書
高橋以て其儀識等来訪

十五日

雨雪、井上居士卯之助を伴ひて英国より

小野の古山を観て、古字等
三笑く黄熟を帯ひし庭の姿の様
津を見て、福の如き雄勢の
印を刻す、

十六日

晴、朝来江上君来て日精一庵同年校其
る、其の所従冊寿後等の者到る、高木
主の如き市郎兵衛の桐木地矢筈香
合を贈る、校正済印其等を大坂恩
佐に行く事来訪、雨時雨一過

十七日

小雨、小林習三並福田忠来る、松井正治の書に接す、松香風華来訪、福田泰三郎の訊に接す、又徳田に於て江木清、吉田例叙に出て史稗田の件に付ての懇談あり、[illegible]のため関に行く、福田の来るを待ちの、原田某来て来訪す[illegible]

十八日

晴、瑞穂会に於て二十五回轉、十時之を了り黒田真臣加賀某と共に歩して帰宅、母大野等来る[illegible]

すは様三ありしに些少人を読め、芳藤義をも返却しも杉山氏も来る

十九日

晴、原杉村宗八来訪、大雨と湖畔に至りて[illegible]泰[illegible]を[illegible]して[illegible]を[illegible]す、[illegible]代田[illegible]

二十日

晴、八時福田泰三郎来て栄式を要所[illegible]

雲寺々宮ひ合舞す、坂田の道を
を得ずて話す、又將村抱月と話す
横矢後原々大阪舞の社も本山尾
一乘海者を與ふ、葉岡正々者を授
す、出版印々於て通俗大々長史を出版
せんとす々々付其紙意也の意案を試
みよりを消す

廿一日

青田の墨天堂、廣田山田市印葉書
春風往村宗八来る、長原野菊
店をつゐきくりとも一二の書面をも

きくし来りも示さる、六時にも例年の
ことく夏祭講習会を大々講習々
一所く越の生々の也初まりつゝ余開
会の説分を演説す

廿二日

晴々川つゝき佐氣壁西しく冷氣
を覚ゆ、得元うき抱海女海記所来る
余の海話即ち口授筆記セーむ、往村
来る横矢後重原不日洪海々出版
所生来る来るとの故必めを拉して
神田色々物を備ひ上野演芳を散

廿七日

晴、風、高田原榮来話、光めを伴ひて高田道に到り與兵衛ずし
に飯して帰る、方沒の薬木の元左印
垂房の難りくる分積あるも、桜井市
必真崎合城旅館論に帰るも来書
ゆるも、大阪砂川より切り付け計算出を
送り来る、大雲木堂に書く様す、

廿八日

墨元、[illegible]、[illegible]崎桂書を麻市に訪
ひ終る坂本桂沈を訪ひて其の賞[illegible]

の書道を窺ひ書を清す、[illegible]
に和山堂に[illegible]家山岡を見
[illegible]、[illegible]出京を聞
す、

廿九日

墨冷、[illegible]を旅館に訪ひ
同伴寺崎房業を訪ひて書
話し其来花の書道帰印状を観る
去つて[illegible]あ[illegible]骨董舗丁
子屋と訪ひて書画骨董を見
賞終に[illegible]し[illegible]

○八月

一日

[illegible]山本[illegible]士[illegible]村[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二日

[illegible]川上[illegible]外[illegible]

[illegible]

[illegible]川上[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

原藤井健次郎ヶ和七時暮停車
場迄出迄ふ天望ハ御ますやこ投す、
北越行精社ニ同人ニ招ニ入余すんん
常服石屋ニ到リ日新ニ経堂上ニ
付坂誠する所あるも十二時比石塚ニ
へ帰へるも眠す

三日

雨、浄雪石塚方ニ在る川上漢一郎松井
郎治 隆為美所ニ候ニ投ス山田外一人
三条ニ於て講談会を催す休ニ来ル
天望社ニ於て詩の、年ハ一時ニも出生

座ニ於て投ス今ニ侶ニ講談会を家
く所と出る余も出演す、終て常
服石塚ニ於て投ス大会を家く出席
者六十名、余ニ当投し報光演へ説
を為す

四日

雨、浄在前日の如し外賀ハ三長九州
儀左ニ門望浄悦一郎休義徳三郎
五十口風矢文ニ来訪、十一時天望ハ
此ニ北越行精社ニ到る社員と紀
念撮影を与し職工ニ到し一体の

訓読を為す、子共加賀守ニ来る
此如何様ニ而も候ニ付き故ハ
の係を蒙り記セしむ、ちうもの
如何様ニ但早大謙読候得共
ニ而も合論ニもう余も入会衆ニ
就し一論の誰論を試み不縁か
加賀守田伴小作出ニ而をも守も其
不義の係えいきをてる不義候
数ニ蒿問のミの側ハらさるも
子孫も云やれあ係利ある、
田代真家坂崎切中ちもしま青
もらも、思ひ、答無、不被ニ当ニ在し

二三家押寛も十四日迄被寝

序

元禄の時、一從年の前より長五市
大生形様形家の事心ならず達する所
紛ら持ちも篠井氏代々生形の為
職在不通と存しこゝに於て此家の
道家ニ而、徳永重春を九的年の流
系より初而ニ新く事完ふも長く遠の
法形案家を理まり操焼しまも十二
明治前年桜在と出く之ん保田
話候と入る、事持義義候　桜井市

心理命三心於井印治於木弘之交
〻来る、高橋義彦の切人木村井
香其の跡屍の十六羅漢印并〻
合義を高らし十まりて見ます、且つ其の羅
漢印譜の割三寸を二寸く、東京電
并〻美事く流布不通地東おくん
る旨を電報す、此江家主婦まり
見る、と称天皇為之所得〻来るの
約あるも出来のみめ十まる能人さる旨
電報あるも〻称鍋茶屋〻於て拵
を合わせて四十餘名出家十二所悔く
り申す

二日

快晴、此称三条にも山田迎へ来りて
と新田所呼び起さん一番流布して三
条へ赴くことを語る、起きて戸おし
こ伝川所量を拵すると此称もも正
さる一人坂所三条へ赴くことの危
険を載し電話を以て三条に照会
の上二番流布に上らんとて停車場に
ありしん一番流布の電田の先き
る脱線の為め不通とのすこと近む
さく三条行を見合せます、稲井市心

父子熟る尾義房方来都治一栗来貞
吉松井高藤嘉川（通二）等交と
来訪ひのも時候晩秋不定の行を
終り不快を覚る、今朝又投友と松
こん徳永と共に川形亭に至る松
木松井高橋（東七印）嘉川等来
会十時頃く辞す、

七日

時々乾中望来稲来訪物を贈る、自
家の経営手業に関し長時間話して去
る徳永金春も夜く向けて来る松井印

流来訪、松木弘毋為氣に付物を贈る、
木村作雪（政生）に書を投す、栗来に物を
贈る、長田に石塚に出を投す、近江家
に前年に勧定掛録に千円也交付す、
正午高橋義房来る同伴川形亭に
到る、藤井寅一印路庭の印譜を商
らしまる入江左一印も来会四時頃
松客を謝して都らすを辞す、夕刊
新聞信州濃く開通を報す

八日

時候稲産の妻同高松田印来訪、今朝

年来朝鮮支那にも高くし来る古
説を鍛鍊しよ鍛の鍛を受けた
は二時間も、丁子尾を保て書を
す、

十四日

時々雪あり塩原の方に雪の青に接
す、其後桂沢ともに和尤高し青状来る
塩内細々来仿家宅を貸て拾ふ、精あり
物を飾る、高田丁子尾石井安藤が
交々来る、之賀其後ゆく返書を書す、
米峰ともに木尾高子一繼完のたらん

為相者いさゝ直に送す、高木を結ぶ
も鞍漆の書令を嫌ふ、出版アの
山来訪、南蒲城天山田なこ丁鶴
三條諸訪今の景況を聞し来る
河川雄峻にも来書ありて故郷行
報らし紀念を与へ来る、
亡児殁前日に行信を抱き渓死
せしむ、

十五日

時々雨、亡児様忌り行信を渓
む、来迂に亡児墓の田あ木を抱す、

素田先生事紛、石塚ゟも其事告望
又雪之のアル、ハイを贈る、余ゟも西
帆屋ゟ紙文找料荒平を郵送
す、英雄をえる、不在中高田又の長
来訪、京都修正ゆく此ゟ元寄也
る文晁之帖を通返す、

十二日

暑風、未迂亡此の墓のスレッチを作り
来る、加能作次ゟ(移文)峰村抱月殿
外まで来る早稲田講演の紀者を托す、
坪内邸宅木村周穂ゟ壹印鴻斎木

村く電話ゟも接移を為す、程於宗八
来訪、法吉会新ゟ七條愷書苑書
ゟ貸来をもふ為来る、流しゟ言ふ
亡此墓石渡又の件新書田高
橋尾く依頼也を為す、又坪内
返ニ書を投す、高田立長来訪、日
体上野ニ数茶納涼場説今を観
る終りて常田花壇ニ吹飛とも
して帰へる

十七日

快晴、浅米里球園ゟ所持着

[illegible]

十八日

墨[illegible]

[illegible]

十九日

墨[illegible]

[illegible]

田代亮に以下十つ、骨董を鑑賞して
物を入る晩飯をしたりしなる

二十日

雨、田中進中村家に地本四行政
廣田金拾来訪、主役大夏忠友来
訪、蹴出版刀の頃迄早稲田俳演の
件ニ付来訪、大阪砂川とし文蔵堀
会次第来書を送り来る、在英京田
和三郎とし得たりとき来る、又市場格
次とし来書ありし、

二十一日

此所にて暑風雨ありて夜来こゝ雨未
ふり、芝田高橋八書を投し又
亡兄墓石の手法書刻字為替
郵送す、関氏宛次文蔵堀内
の件ニ付来訪、文蔵堀内に暑
の件ニ付砂川旅館に書を見す、
高橋義彦来書に書を投す、中畳
すゝ殊ニ今の鐸次郎に書を投す、代
あ上井廻田馬地とも高田二子長の方
到る、四時に海雲にも、杉山義吉来
3

二十二日

晴、校友近森一男上の体うけ来訪其
田舎何も来話、石塚松に就らも来当
何も此を拾して根田道を散策し洋
台を喫し帰路高木を訪ふて帰る、

二十三日

晴、安田重来訪、終日当殿の茶屋
を見る松山花見来る風邪の気
味あるも服薬す、今夜殿の氣
雲の飛行大夫当田を至とし夜
支持田志丈夫村一左ゝしを起飲

狩漢堂帰る、坂口立峰の者ニ属
す

二十四日

晴、政本三郎山田宇基山河地研道
吉田半道交ニ来る松木弘田の訃
ニ接す、江部清久妻危篤の報
到る、内務人竟ニも来当ける
寺崎廣業ニ当を授す、松木弘毅
与ニ行香菓料当田為替ニ送る
亡叱墓花ゆうけ芝田の上地ニ立ふ次
ニ当を授す、風邪未全つす多少
の返ひも、田マレーチンを服用す

晩、今日須本桂流来る書画を示し晩食
を與ふてある、

二十五日

晴、左右衛門上来の高田八郎に書状を作る
此墓の体、青芝田三四市本とも返書
ありし、英市を紹介の扇帰り見て能見
扇帰を送る須本三郎を紹介の不遇、家
田翁の反面を捨しこれ家選り出し
書ある、方々、書類を依頼す、桂内
閣総辞職の弾外出づ、閑に乗して先
考千字の詩本を校す、夜間須本三

郎来訪

二十六日

晴、終日苦熱、過くうくし、廣田来る
夜間思来る、洋行中に内ヶ崎作三郎
帰朝の日なれども明日不宜に為行の
すゝめ、高木を訪ひ、大唐新書二
女死亡の為中寺まで力き、河内力に
立寄り帰る、

二十七日

晴、英市と扇帰と相談来る中澤重治

上野之[illegible]家[illegible]、南極探險
の神代来る今は後援隊の会計[illegible]
[illegible]、謡もず返へす、氣
分すぐれすすまる床中は在り

二十八日

晴、終日骨董油くをあし芸瓶を
おくりしも忘れて床中の又は蕉庵け
中奥の親川心毒絵の器を見る
可、或許の海しる汗の代償し
[illegible]湯を[illegible]
来松純一能来[illegible]
[illegible]

[illegible]英[illegible]
図に書[illegible]

二十九日

曇天、かしく瓶あるも芸を以つて拾す
るに値する五分ほ瓶なり高し、此の
こ引つき日骨董油くをあるす、高橋
種来[illegible]
忠[illegible]
投す。

三十日

文藝眼の事詳細の書を通知し来る。

九月

一日

曇冷、枝反祝川岩次郎一身上のうち
行来る、高田の家もちを訪ひて話す、其
世と今もう罷成来話、体温、春山
に復せり 和夫 喀血来 [illegible]
山来冷 [illegible]

一来り居れり、

二日

二百十日曇冷来稿、体温平常に復
す便秘解く、高橋義亮に家に
印刷を郵送し、[illegible]の井香と義
井に[illegible]送致を托す、小姉阿太三を報
き同時に[illegible]を寄す、桂洲村来る
内蔵の鎌定をとらず、真松洲蔵来る
浦来聖珠園の消息を傳ふ本当に教
来る、田中唯一郎に会して借用金
の件を話す、一時にも城内方に文藝

二十日可也、境間大阪の侍文書来る

五日

昨、廣井一弟源之丞、一身上のる
行来、清、廣田河原骨董を高らし
来る、河村也三四天線のこと侍文書
の件、本田尾敬の侍の件、行来る
松本家蔡王安の訓の書簡を受り
て来る、三十四日、雖ひ入る、南極採
隙、隙の事、堀内靜宇、兼ニ郡代来
話、大阪の侍文書来る、昨在兼猶

理の帰を請ふ、異事、殊所難候、横
山正存ゝも来ず、当日不得
出齋ニ、金曜人今日ゝも出席す、相生
和あるも

二日

雨、極ニ清案一身上のる、行来、清、寺
崎廣業高橋義彦の書ニ接す、山田
清風来話、ゝ的美術と今ゝす、不正
巾吉田雲谷侍文書来る、

七日

九ツ

時、素山叢ニて余の寿元を載
せられし流例吉輪を贈り来る、大阪
博文堂主人古香閣一葉と挽五帖ふ
郭過す。文三郎南にて楊浦十月録
綿翁篆書を賜ふ、駿河及び余の会
ふるや否やを聞合はせ来る、中巻の大
西、青年の件ニ付挽ニ訪来一身上の件
ニ付来訪、吉田氏過来る。勝田大使
木公会ニ出席、大臣博文堂並ニ
南葵文庫の桜井氏五月二吉日
校す。文部次官雑崇録二部二寄せ

昔より菊池晩香に贈しける不付
には余か銘を、中田氏孝九方
よし伐来る。借用の山路君の
沼田一葉相逢ひし縁にゆき女池
寿来訪、

十ツ

時、日限、菊池晩香ニ書を渡す、九時
ニ出て駒込に向ふ湖畔の
指定を見る、浅草ニ散策、西
二月二日三百余と流動
をえ、福岡南ニ遇ひ三時半帰宅

南蔡文集橋井清十一郎ともに象山印影四五枚ヲ訪ヲ印三部片木ニ勧進二部氣志橋年譜を贈ふる。

十一日

墨山又江其二来紛大橋、初六ヶ訪ヘ徳川太平記を見ゆ。愛くる休行交渉の事を称す。橋井清五郎ニ書を授す。各賛書雅ならも書簡則来扇氣ニ可愈ニ紀念ニ早稿図書頼く五十四言詩ニ書ヲ直ニ返ニ聞を授す。登校事務を家す。四時も飯田河山ニ行き竟橋ニ来唯履ヲ送る事を見ゆ。明部の海輪会を見て、大阪の柳川雅峻ニ文蔵会堀会演劇法、来ニ尻ニ関し書状を書す。

十二日

雨次氣志し、二ヶ廿日平穏、二事館ヲ抱ニ清策、演出ニ戒流印来訪、習謹一ヶ也来書訪ヲ、登校事務を家す。塩子中村康ニ紀兵儀季流中村直午と流す。略ヲ英雄と

会す

十三日

細雨霏々、冷氣初冬のめし、文藝協会
私演ゝるゝ有、東儀関屋辻ニ書を投
す、元帰、墓花のるゝ有、[illegible]
椿屋ニ三回市来ニ書を投す、文
藝協会特別会員募集ニ於ケ小林
堅三を[illegible]各方面ニ也ひし波説セし
古、椎尾雑匡佛書刊行ニ伴ハ有其法
蔵本ヤ久江径村を招き人名辞書出
版ニ付寺業上ニ協議を[illegible]

貴す、[illegible]投事務を[illegible]、早稲田
講演の[illegible]会ニ[illegible]協議
す、

十四日

晴、土屋論義ニ伴ハ有大村
西崖佛書刊行ニ伴ハ有石橋貞男
日本[illegible]会ニ伴ハ有加賀[illegible]
小池謙吉印北[illegible]ニ伴ハ有其
法[illegible]を[illegible]す、[illegible]氣候[illegible]
[illegible]、登投[illegible]
務を[illegible]す、[illegible]式法印ニ[illegible]

余の義貴を出陣せよと勧誘し
来る。

十七日

晴、日曜、来客なく、よる庭掃除
と夜服に明刻を消す、大阪の陣
久世に山を投す、かゝ着茶屋来る。
夕後所辺滅雲あり、新通に次度
此所施盟の為の勝らるとの新聞
勝の出づ、称するの杉山来る

十八日

見物、唐田華山墓の楊ひを高
らし来る。往村森来訪、日皆文訪
中略却拒に書を投す、入院中に
廣井一并坂本高山助立に書を投
す、文蔵坂合体に行石海取一に書を
見す、田原万侯償却し体に行高
田と坂滅す、半迂来る書簡の甚
洪を托す、参投する物を見る、出陣
部に蛇渡入ル花を建築に行
の宮地を見て位を定む、英豊
会す。

十九日

晴、幾日堪へ、こゝし、抱に法、来吉
田求迂来る、登校西に就寺の
供者来り、高附金こゝしを為
す、ユ手学校の方針を規定す、
三時清玉亡命、答案を為す、
リ一場の演説を為す、今朝学
校同人、家を訪ふ、館に迎へて
小宴を催す、大阪山下に紅士より
来書あり、深和和安母来る有

二十日

日雲、石渡町一郎本桂流の書到る、
井田三吉町(二)来る、印刷分紙
の金銭分に臨る、今成に毛的可を
しりし、二時登校出版印刷を為
し中学講義来年四月迄、其事
所の事を規定す、杉山南方来る

二十一日

晴、田邑町文次郎吉田求迂、阪山町に
迎加賀守に、小池誠吉印来訪あ
り、午後登校事務を見る、高橋
義彦に出を進む、京都の西に就

寺大阪の山を越し士二寺を投す皆
桟田也四的迄文藝堀金碑文
所に至る。明日清劇要如何
里之内輪のものに見せられん六的
とも要請、晩月十四日なり

二十二日

此夜来大雨降りてく、投反作伯林
象新復築、六人以来一妻既又次
即来話、今夜ぐも理内方に到る、今
とも私清を深す大雨しる入を氣
をしぐ事に二的頃とも雪ん、続く

親客来る親客家九分通り基
うる、理内の通り也の間家ある式飛
あるも八飛の家二莫市寒山拾の
お七吉三、鉢うづき、九的頃とも
酒ぢく、俄優の投氣をも投し上達
十的頃也

二十三日

時時、廣田来る、廣井一来話、綜而
加賀事に来る此紙行情に不絆
竜法屋の様を来き余の法行
を続載せんと請ふ乃ち四五日法

柄を以接筆錦也くしたゝ多段なるも
接事務をとんる。この所なるも文藝概
会にもある時にこれ引つゝく私漬なる
満員盛況を呈す。閑坊新舞
しうくる。今の家族を見ゆるを
す。塩子荒一ケしも来者なり。

二十四日

いつ曜。快晴。左衛門河内殿にもなし生
魁を贈る。宮原正秀男正蔵来り
夜拂を贈る。重田小拂菓四ケ大
石現田来訪。今夜なるも隣内の私漬

坊にもある。堂刻にもなし(五漬)有り特に各
方面にもなり力者を招待す。方隣居一家
安田平兵衛一家村井一家各方面
の文藝家多く来会善通会員
の来会を会したる都十名の入塾
あるし塩を立鉦の他ちまきなる
九的大明来の内に手稽古を出く
仰書後夜会の事ゆ絵一ケ来り
余の西の地印文人あるも蒼さ
とし来る。夜来雨あるも

二十五日

雨、終日こうき続く。

廿七日

午前高田謙来る、程なく帰る、
又鎌倉へ天気晴渡く、天気を見
正九時半家に下車し石塚に泊く
同人の案内にて二三の縁者を訪ひ
へ頼し又郡役所の役口出生高橋
義三氏に書を投す、十二時石塚を去り同
伴汽車にて郡津に下車し平太
郎を経て藤崎に至り田に着す高橋
氏に投す、

廿八日

雨、早朝昆田の死戒中西亀吉を訪ふ
亦去、田中作太郎に来て…を出し子
を訪ふ、冊其…に書を出す、八
時石塚と共に僕を伴って五十嵐に到り
浄念寺を訪ふ、雨中住職と共に
先考の墓を撥数し、雨の中羅を
縛ち墓石を天神山に運ばしむ、礎
石重くして人夫運搬に困じたり、此年
像に埋めある骨壺を掘り出し更
に骨壺を瓶に収め上に平石
を並べて更に埋め墓石の位置
二時間を費やし午後一時過ぎて成

る、石塚を當して三段の為泰嶽為
并に亡叱の墓を撮影し寺に埋
り一周忌の讀經を請ひ事終
つて寺僧の御案内にて溝に家の御
墓所を訪ひ外に二三個不幸る
地を見て五時に新墓田くらくる、二
三のえらきを電へ出す、小田路俄
一印与屋元永次に會す、田中に
返電に接す、石塚先を付ふ夕
景もちらく向け出す、
妻の母の五十分屋に或許の土地を
特見と称し二三の地を検す中に

意に適ふ事なりしも右の事人を以つて
元朝にて家に皆家に障あるもとへ
即す　溝に家の御墓所と云ふ者
小親撲ちくらる度ひ是を致味河
里石塚松鞋をして撮影せしむ余
の年の後五十分屋を忘れ通る
すべきにてくく栗華寺駅
なりしうちに麻窓を拯む然
れども村内を探討すれば田園執
味に高せしむ事なし妻の志
後の事を定むるも此地なる哉
墓石石材断刻運賃仰定三十三円

也和拂寺く五四寺ハ今和宮の御
策に報ゆる高橋殿に飯ひ、上野立
永沼来る丹羽伯丘の墓紙拓ひ
を終る

廿九日

明時、秋冷を覚へ、果唯一日、手紙
入告材を差送す、三田村ちゆ来訪、中
西京造来訪五十分間方面土地購入
の件を相談す、中雲く物を贈る、九時
半雲家へ向け出発す、十一時半萱
堂のう尾宮に着間もなく丹善忠

人来り返くて、同伴丹善に到り来
日歓晴晩あり、後飯して庵室にかへ
る、丹善忠大ゆ達三宗支庵室へ
訪ひし来り屋風扁額、大揮毫も
絵数あるも筆を走る十数あるを
書く十二時に至りて罷ひ、

三十日

小雨、明雲、早朝より四五の揮毫を
為す丹善忠人、十二時より五十分間に
土地購入の件を見人に托し十時庵
室を辞し、明時一時萱田に着す

榜尾に子孫を志ゝて見二的渦川へ
向けて着す、二三の絵をのきを東
京に着す、三的江真の方へ着あ
る家も事会主人主酒頻時頻に入
り着す、沼無辺に人達中驟雨に
遇ふ八時十三分沼無駅着汽車
に投し十時半ちつ着、石塚方に
右す

十月

一日

雨、度音の為一番汽車出来を見合ひす
二回廣井中池等に行る、此に人続に来る、
同人の雪に座し十数番揮竜す、正
久比紙行頼社に抱えん常裂掛く
到る内田廣井味方二回中池来り会
す、二的辞して石塚方へ帰る、旅館
裏風来訪、五的十三分着直る
汽車にて着す、車内人多く熱
睡を得る能わす

時、三刻ニ至候ヘハ、左近本江部
浅夫妻皆々其の後雪隠ニ而帯
竃を崩シ、桑田千代家庭吉
蹟を拵へ、吉田某(印)手紙、悦田義
一ハ、浅を流しも丁酉銀札手紙外ニ共
こと而済花銀札ニ差候文ニ差入
すへき手紙七ヒ千両の義書を差出
被入候ハ、受取しも候之差入候ニ株方
七ツ頃、茶務の務を承り候ニ付宿
吉兄弟ニ文蔵を招き候ニ、尚ホ今晩
り出し、承り候、拾ヒ手両方ニ



風、丁酉銀札七ヒ千両手形銀渋ニ付
為済花銀札之もの外印形株方
掠除としも三千両證文(銀札六百)
丁酉(印)、差出ス、去冬ニ於テ拵し
候、勝未回停止之差札大ヒ判二
回之事、今朝保治之和も無余り説
をまはさ事ヲ残り、則ち埋ニ而ニも有
き、前嶋長として対面致し、彼ヲも来
式高体構しほを決す、五日南方
常構し且未此所来る、又到来候也

工科各方面の撮記すべき個所を
挨拶す、幸田君の書を見るに、本田
成友氏徳書館記を贈る。

六

明治山田清風吉田半辻真一路米田
印旗戸中学校長沼尾氏次印来
訪、真一路氏を贈る。今夜一時より
於山和夫葬式に行く音羽宅より
於中一高坊に徒歩すて随ひ
二時善家にて入る 高橋種雲江
部演夫らし来書あり

七

明治、於理教学部にて讃岐の昔日董
商業務と相を高くし来る見すが賀
来三来訪、吉田半辻恩賜殿に揃
く命き 明治の間あれを高くし来
本田信夫 幸田正又来る、加賀宣
吉親作吉にして林橋を贈る。本
日大阪府高田学長仙童に向け出
発す。発教る務を不る、丁字屋
宇田精 来病美て書籍をの見す
明治九年高田治一郎来る 夜会

却々於ける余の志を地を十四（保に）
二買ひ求めらしこと云ふ者出て高思
勧むるを続り換地の買受を取し
其の條件地を見るを為高田保可
同伴蔵会に捨て徳川修正地
地附近に細地宮地元文七十年
五万坪に地あるを換分し其後善
家に切る此ある和島婦狀汽
車を切る（来）に乾こる。

八日

明、小茂美志天佚物絹、有九枚新傳

二出来、同此印来話、骨董二十数
点代價約以為用也高木万一老し
壹印を托す、表皇尾く名家文面
二重に雪舟子文二重を志壮を托す、
大木操杉山茂丸来る、吹を拉して
四巻に数葉し三河屋に飯して物る
夜来雨あるも

九日

雨、庚辰来り古磁の研屋を持る
白鐵印二顆寺崎に元せる所を
同人に為持老り、素白毛風来る。

高木を紹介せ苗絵告会（朱子直）
山田然雪左衛一を勝ふ、土地（高会
子於けり）交換し供給場田義一
を紹介不在、高田絵一印にて出を
與ふ、新井高一印、鹿谷来紹介を
發ふ、鹿谷をともなしてあるべ

十日

墨、[illegible]田山にも手紙拒絶七寺以下を
發す来る、松本家恭来る、廣田山田
清風にも来書ありしも加賀守に来る
比紙紹介賴に掲載すべき紙言

舊事法を二三所可語話し草紙也
しかしかなりし登校事務を見る、
浮田村氏も洛文朝に文明根会に
関係ありて云々の新絵を受く、與書
軸にも自書活書三味紙言其故
業を終る、

十一日

如時、高木紹にも居り紹介書来る、
大石鹿目書面来（迂）来る寺崎廣
業に書を投す、高田絵一印にも供
入金利子の計以前を如き登校

事務を見ます、増子元ゟ申る事
こ紛ひ落合村土地交換の件を根
識して聞くる、高木胃量庵を訪
ふて滑り勧定全部拂濟、山本
知士昆田文治ゟも来書印を

十二日

晴、植口功一馬上の件行来る、森
井穴一行来訪印書を示す、松本
彫茶来り名家吉簡四基を示す
す船、鉄男の所而庵のよし、嫌
入を得す、十両東遠ゝ書を投す

を得ず、投書を務を受ます、江部
渡夫亡妻の遺骨を拾ひて上京
来訪あるも、今朝新河の鉋商三
心外新河機械二三を栗山の
御廊に根紙、自働車を御ふて
家に帰へる、薩田貞敬来訪、

十三日

雨、廣田河里来る、廣田とも得基
相宮三郎河里とも楽の書を承
一を推ふ、京田弥一印来る土地交
換に付義論の意志を表明す、登

枝あり多見委員を置くこれ其
の準備として一人調べを為す出来
者少なき枝枝これ終る延会となる
又梅の清業洋西道長に書を與
ふ、信来を新文略画すとんなり三
回前通云此業をいし、和田英吉
の書に接す稿友会第一回(二年)を
我の学生会を十五日なる大
隈邸に(あくら通)到来る、あ田旅
館にも丹波宗苗木を城内使
ると丹波に来る、杉山代を来る、
左附員北堂より丑書あり

十四日

雨、程村宗八来訪出版部にて其を相談
す、伊太利書記利こゆりも消息来る
英国にも順天堂房雲雀を得
り来る、登枝寺跡を見る、江部安
納三百式を同ぶこれ日部を書す、晩百
寺あを見て散策四条に飯しもう
へる

十五日

雨、幸田長風廣田鳥松来る寺跡

二十一日

を終り来る

二十二日

雨小雨、風、と雑英来之扇を閲の、中村
康之助の西書画来る、加賀守之を知
き蔵志、鷹甚話を第一記也しも然
其法即の書と接す、異本の好存
井貢一印と書を見す、吉田半道を
招き筆方思賜館室名押竜を
清ひと考る、前尾書籍居来る。

二十三日

時、風、平雑英来の扇を閲る、石立中
中村康の来り物を贈る、京都吳村一太
郎より桜茸を贈る、吉田半道山田
清風来る、吳村一太郎大坂の博文
堂こ書を投す、の坂林慶良傳也
刊行会の白石廿方紙来玩、京都
花宮格家より桜茸を贈る来る、
関西より新し桜茸刊来る有
ゝ頒与す、

二十四日

時、恩賜館記之の件ニ付 松平原四来

川西ニ函花七緑を嫌ひ遠ニ来ル、
大阪城又出ニも来ル事なれ、花尾嬢
ニも松茸を飾り来る、又紫の数ハ印
ニも松茸来る、井伊大老紀念会
西田状来る、秋雲の国動なれ付休校
のうめたりとも（函校、発校の称を見
る、大阪の上松宮ニ改集の国に代洗の
書ニ接す、在羅馬方巴利ニ印ニも来
出ずれ、ある時村紙を金の国来館
長伯宅来ル（西宮代理来年十月
此日館長と学生宅ニ）新経験の館長
と学生ニ決し館員ニ引入会を与ふ

書田弥一郎晩日来り土地の件ニ付
云ふしも去る、大阪原田元左来つよ
り西行又書状を贈り来る、松茸
を東田ニ分位鍾田松生ニ配つ、松山
来る、田目橋張ニ来ル休あるを付冷
泉をとる、松ノ又ハ旅館ニ甘恵風来
る

二十七日

晴、安田動来訪同行安田の方を
訪ふ古宮院をとる発校の称を見
る、ある人会を因賜館

三十日

曇、冷氣甚し、吉田本迄ゟも伏来る
黒花を飾る、永井一禾来訪相葬
を飾る、発投事務を處す、黄昏
来る旅客を受ク却す、

三十一日

晴、種村来る二十一史洋画家解弄版の
を譲す、発投現事会ヲ運動諸處
地嫌へし件を内決す、在屋馬巴利三印
ゟも来書ゆるも、現工料を撮影する為ニ
地の調査を為す、京西所一印土地ニ
却ニ件ニ来る、

十一月

一日

晴、京本を飾る、ゟ後発投事務を處
す山本知士ゟも来書ゆるも

二日

晴、早朝英雄を扇院ニ訪ふ、夜
成親の大掃除を行ふ、石塚五郎
此日ゟも出来ける鯉乗菓式を飾
ふ、午後を共ニ了、午後ゟも発
投、札幌子ニ料大学ニ伝ふ、

たて物へる、夕刻書法田辰教授と計
遣を為さんとなるに高田正義稽古と明
進物に金す、

十五日

晴、早朝里屋恒来訪其の書あを持
反永井掛を了に、[illegible]と云
々の書法をも、高田孫一郎地不を大
峰人直に読り注す傑に付大峰代
人と共に来る、諸書を必ずも高田を代
理として大峰を[illegible]地代金内
金として就千円立文元登記を十

二月十九日と約し即名義の諸書を
入る、吉田半遠旅館甚感激来る、
登校の事務を見る、永井掛を了の
足高に付内ケ崎地三ヶ所を読す、
共来流印に書を出す、

十六日

十雨、廣田来る、[illegible]町商業[illegible]に
り地不内金[illegible]千円小切手請元丸善
書店に立寄り一二の書を購ふ、[illegible]
[illegible]登校事務を見る、高田元電に談
りんて[illegible]事[illegible]を[illegible]を[illegible]る腹式呼

十八日

晴、此日は引つゞきこゝ氣節外れの暖氣
にて氣味あしく、日生理を紛れて
日話す、高木理田屋を紛れてうくる、
石塚ニ至りても其書刊り金石を
紙新稿へ黄印の件、承諾ニ相
到る、大阪博文堂ニ托しこる石山書
簡黄印の件ニ付お任ひしこる旨
報あるも、吉田在東京、内子胃
痛ニ苦しむ、

十九日

日晴、吉田生迄同現紀念館額の家
字稿を高くし来る、本田住取来る、找
友方終納商松本里ニ至る大路
一区を経て、松本風蓉庵終来訪、
先を住して上野迄を散策す、雨ニ
遇ふてうくる、終日もし紀念家を題る、
石塚并ニ博文堂ニ書を頒す、

二十日

雨雪る、松村通三来訪三木住八ヶ時
ニ至ることを、大江乙之ヘを招き文藝
堀居特別会員集の件を托す、

加賀家ニ於ケル新報所ニ於テ
誘ヒ来ル、冊美ニ於テ誕生祝ひ物
来ル、今夜ハ登校事務を見る、
三時ニ巴井上原本ニ上ノ海原業ニ書を
授ケ、皆文藝根会のるゝ、ニ関ス又ニ
井貫一ニ書を與ル、是迄と好評の件ニ
付新井様ニ於テ統ス、ニ於テ一ツ授
ル事ニ関ス、ニ関する機会ニ於テ清
濁会を要倶ニ金開会の辭を除
ル事会ニ着ス前授業義并不得共
平次男不得云の書列る、高木方ニ

二三の淘汰を解ル

一

二十一の

雨後晴、国家復河鹿ニ鍋ニ削第
一本蜂ル、夏木を結ぶ以代隅畑禁
大節ト象ル杯一を解ル、中西色ニ新
刊書十数冊を解ル、明日也、今夜ハ
登校ニ務を見る、新築書国家
足跡ニ拂ひ、今ニ挽分の上ニ夏頁
河ニ手を離る、不堪ニ也
清葉ニ書を拂を拂ふ、今夜清書
夏ニ講演会第二回をつゝめて出る

り示す、加崎郡の手紙略り、紹記に付返印金壹圓五十円和家に交付す、今後二印より大隈印に授受の秋季之親兩人等を催す等也、其れ二付余一端の濟線を為す、出帰らば清玉諸濟合に行く今日諸濟者市村瓚次郎吉極篤恒とりて閉会を告ぐ、在大在）樸矢金道の書に接す、

二十四日

雨、我胃を荒み、廣田河内壁十来る山崎直三より果物を贈る、大政中村伊三郎より自製の草大小を計を贈らる、今後とも温昧

二十五日

雨、松村綱三、永政周、加藤孝三、八寺を教す、巴利三郎来訪す、然をなす、寺崎廣無来とも返す事る、今後塗教の務を為す、伊与印大夫洲繁有来訪、京都田山大匠に恩賜領に墓都押竜を元の寺を教す、伊藤金次郎に寺を書す、

二十六日

晴、杉村塩三ニ来ル事ヲ申シ、高木ヲ
訪ヘテ骨董ヲ見ル、散策京橋ヲ通
過行きヲ見物ヘ、ヲ取服采取ヲ
塩取ニ不稲君ヲ学先進機ヲ
取ル出来一塩の演説ヲ為す

二十七日

晴、廣田ニ梅宇郡女ヲ見ルの事
簡二十里ヲ縁ヘ、日清印刷会社の電
後会ニ晩ニ、ヲ取ヲ登録ヲ見ル、
讃岐の前橋茅義来訪、杉山義

夫来る、日本電気ニ来ル事ヲ後す、
又柏崎中村義八ニ書を書す、九
時過地震ヲ見ル

二十八日

雨、半近来紛、異本ヲ取ル事ヲ
墨を絶る、高木を紛のヲ古錦大
屋ヲ張一を縁ヘ、ヲ取ヲ帝
國劇場ニ文藝ヲ根会劇開演
二幕見物ヲ物ヘ、外賀ヲ
ニ来書ヲ見ル

二十九日

雨雪、寺崎房女来、早坂英堂才
ゝ、[illegible]、岡山大迂[illegible]来書
[illegible]、[illegible]義[illegible]を[illegible]
[illegible]、大石熊[illegible]来書[illegible]
り、[illegible]二三[illegible]を[illegible]、[illegible]
の[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]味噌を[illegible]を[illegible]
る、杉山[illegible]来る

三十日

[illegible]、[illegible]龍[illegible]女、[illegible]

[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]、五十
[illegible]を云々し
来る、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]四[illegible]
り[illegible]、[illegible]味噌の[illegible]を
[illegible]

十二月

一日

晴、昨朝[illegible]不快を
覚ふ、[illegible]人少[illegible]之[illegible]
迂[illegible]去[illegible]之[illegible]、[illegible]
[illegible]の[illegible]、[illegible]
[illegible]を[illegible]一二の[illegible]を[illegible]
[illegible]

二日

晴、在京城商人[illegible]を[illegible]桂湖村
[illegible]、[illegible]

[illegible]を[illegible]、[illegible]
山大[illegible]、[illegible]、登[illegible]基[illegible]
[illegible]山本[illegible]士[illegible]、[illegible]
[illegible]を[illegible]帝[illegible]之[illegible]劇を[illegible]
[illegible]

三日

曇、日曜、[illegible]骨[illegible]を[illegible]
[illegible]、[illegible]人[illegible]
[illegible]、[illegible]人[illegible]山[illegible]の
[illegible]、[illegible]
[illegible]

の英雄を二頭中に摘て描き流す、文藝
協會劇にて成りし松井須磨子
男名義にて脚本家を帝劇へ登場
にて公演し東京日日を受く、巴利に
印象派の影響を受けて、又大阪の山
本紅士も来たりしあり、真崎行く
挑を終り、新ら文芸女性劇
林絶えて之を書く挑す

四月

日曇、晴、鶴田氏に端して来たりあり、
高木を訪ねて青年間二日を叩く修

登校中ぬを見る、以下も移りやし是
惜むに対話つひ不在中しらせを覗き
ます、今秋日本の印刷会社にて出山
高等師範生を上宮常盤華壇
に招ぬ余も人例として出席す、松
本氏恭も吉田間に十五通を買ふに
ぬその日も来さる、内子日印に於て帝国
に行く

五月

五日も国子は河原太江に至る、つ
る、晴る家庭の為に記者川副と有楽座

来る婦女子の当務又ニつき余の法話
を結ぶ即ち事記セしむ、ロ長人記者
多数発起雑事る、山田ニ就て一法一
言の好を交付す、杉本乱蒙事る、
古間三十通代三十四日お渡す、
少和望三を紹介、きらし金三百円
借受く、寒田中略ニ百、新紀十
二月廿九日也、渡辺（印刷写記）来
り此頃ロ聚華漫くし世界を
謝して去る、今日ハ印刷の
金後会ニ臨む、中村藤八和多吉
の已ニ接す

二月

晴、廣田金杉来る、加賀来る北越
新鮮新田藤ニ登載すべき趣
戯語を取し第一記セしむ、山田信人
来る、新年ロ長人ニ登載すべき
松山物一法一言の好を修正、小林
井宮百しても来書あるも、登校の
務を定む、出版印祈気配当
を定む、山本和士ニ書を出す、湯
峰四屋を行ふ、あを賜ふ、六
時法衣不在あるも、杉山送来る

十三日

晴、朝氣温四十五分、桂湖邸ニ書を
投す。今夜発投す。物を見る、出版
部ニも然方を立る半円等らひ
受く。又配当を九万四十一円請ス
出版部ニも借入逢七万円返済
夕刻ニも日本橋松町やまと
方ニ林甲川山田と会して刊行会
第三部ニ付数潮す、高木方ニ
立寄る。花干ニ仕掛を着す

十四日

晴、福島君石津兵三ニ書ニ接す。
田舎下ニ書を出す。堂前屋を築
て只日女童を見る。今夜ニも発投す
務を変す。学校ニ五丁目通良、銀
り、法学用あつけ、夏く二万餘円
交付す。松本風蓉ニ書を投す。

十五日

晴、伊豆部大元ニも童塔蓋を投じ
来る。心人石井良太郎来訪、百年代
の原道平ニ新聞紙の流筆法ニ並
記もしたり。唐田金松松本風蓉先

直ちに妻娘あるに徒執をなす

十七日 日曜、

晴、房田無松来る、今夜住宅にて
志賀橋に行きの為間接手、志賀
橋形子代金五十円、房田に仕拂ふ、
小林盛三郎殿来訪、図民教
読記者内山省三来り新聞
社会の説話をもとむ、即図書館
のごみと題し、既味話二時ならむ
そして筆記せしむ、夫田村利

七の葬式に悩む為本所押上
真茶寺迄行き、帰路上野に
晩餐を志賀、英雄と今夜
帰へる、雲峯丹美にも慎りを
贈る、

十八日

晴、原来社に原を連来り雷社
して私学変遷の題にて二時間
読話し筆記せしむ、夫田生迄薄
田貞節石井良吉より来る、夫田よ

り登報、御用御多、御用御雛、揚物
の行を作る、図田以来、考す、如何大
略男奇く、發令し土地譲与登記
し約定当日、千塊田方一人を考へす
又同じ株に付高田徐百し来る、例
年に筆舌に図として浜苦と通じて
丹美、其略事家出清賀田、和
良く差出す、丹美て御材を考
す、

十九日

雨、今新和家を登記すべきす、次以
此に来る日清田副当社にも謝を
参る田村屋、山田清助刊り会の
件に付来る、小林望三又来る、高木を
訪ひて貴董三跡を賜ふ、今夜より
登報事務を見る、又刻高田を待ふ
て書通を見る、石本市蔵を在士見
田又御事務を賜る、其一時米田中
岡長に付来訪、土地譲渡登記をする
雨、高田物をもつて来る、

二十日

晴、朝来曇屋来り、せてきの所なく
外出す、高木を紹介を嫁の商
典事相り、ニ拵も地不化を詰え直
ニ高せ頼けと云ふ、高木此を葬
葬兵義入一式を縫の六十円掛
高木外ニ勘定を消、今後も日清
印刷ニ定式統合ニ吹き、今朝上
野ニ幸聖茶華壇ニ至後の慰方
会あるも出席、廣井一ニも来告ゆ
り松本衛恭ニも古商業ニの

三十通ニ来る、菊池ニ於ケ了ニ托し
ゝる不能庵記文の稱書出来
珠琅客寺ニ居ゝ以候ニ内ニ下ニ内
掛、横矢重ニ居ゝ来状あり

二十一日

晴、今朝田原ニ至る子を老し印刷株
ニ十ニ譲り受け現不足ニ、廣田ニ
托して今夜能化ニ御書を直のゝ祝
代上品の御書出来、松本衛恭ニ
書を與ふ、松本衛恭来ゝ今日

迄武治中にも来たりし、稲村宗八
出殿ノ人体有来給、今後登城内務
湖南出来の有者を務しまを托す
云者秀雪称に豊川氏平河田志
流等と人等も学識ある高岡田中
と余出席、今日後新宮の将軍
御行ある侍人多し供有執を通す
来る二階に迄き時刻にいたる
ならるを告げ抗議をし込みたる
上に至を交付せんとしたるも渡く
其不可なるを見て荒干の画帳

を二階に置いて差押へをなさしむ
執達更すべてを解せず唯々其
目録を記しくるのみ、初回皆応二人
曳を来る競賣新訴訟を提
記するの手続を抱滅して去る。下
後頃なると情権者仲裁し込みたる
電報に載し承諾の返信あるも
及ばず

廿四日

晴、早朝畏命文次郎来話、国子数の

詔をもつ云々の電統来る、午後高木を
訪ふて利高の木四五霧の墨とも古
染付皿をもとめ雑色切へる此に拂漏
とす金の電をもて山崎頃思ひ然時の
式を屋く姫的人和ゆる屋ずや 高橋
義龍に書を投す

廿九日

晴、商業講義 改良者へ入し為 出版戸
貞稔村高田奥村来訪、牧里倫次
郎松本敏夢来る、房田来る、午

後にも英花にあるす、外出中 秋岡
聖恩こゝろ子息克己来訪 秋朝
の屋見真綿さ嫁る、和尚文三
室清聖菓を贈り来る、朝にも
人を御ゆる餅を搗く、遍河来り
庭の手入をみす、古見こゝろの茶
間を嫁ふ、一月八日早稲田中々寄せ
古見和に南陸下聖乾 拝載式と
行ふ女子四十四人、露都芳積
矢垂居し書列る、垣内大造 花代四
ぶ来る、今夜山岡大姫大海に向け

出来す、京都の三面共なるも新色
盃を飲まる、ちつ長石塚も餅来
三斗、飲ろ千万る、少刻石塚共
万手少紛、三重湯して語す、

三十〇

晴、早朝津内道退来紛、黒川真尼
主面来臣、兼井忠一山内清尼、廣田
金松交に来紛、接客に花殺とら
九三朝飯す、飯を食し二時に起
り浴く飲す、兼井にも又物を飲

ます、丁子屋にも使すまり物代し
内二十両仕拂、接客に殺を呪を
振く四方に遊び来し所列を
観二三の骨董を推して三河尼
に飲して行く、山崎天満大阪鶴
り重勝ありし、

三十一日

晴、津内道退紛、念銀の支持を為
冬根潤して来る、高木を訪のて
前雲のマクリを切りて持遠に

以下

50丁

白紙

閱覽室